

チュニス大学付属社会経済調査研究センター

Centres d'Etudes et de Recherches Economiques et Sociales (CERES), Universite de Tunis (アフリカ特集) (研究機関紹介)

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	10
号	2
ページ	98-101
発行年	1969-02
出版者	アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00052381

チュニス大学附属社会経済調査研究センター

Centres d'Etudes et de Recherches Economiques et Sociales
(CERES), Université de Tunis

I はじめに

チュニスの郊外にあるカルタゴの遺跡からこのチュニジア国の首都チュニスの町を眺めると、この町がまったく異なった三つの要素からできているのがわかる。その第1は、アラブ人たちによって建設された部分で、全体が一つの大きな白い城のように見え、その中を細い道が曲がりくねって走っている。第2は、植民地時代(1883~1956年)にフランス人によって建設された部分である。碁盤の目のように平面を区切っている道路に沿って、今となってはやや時代がかった感じのする建物が整然とならんでいる。カルタゴに向かってまっすぐのびる大通りも、今はその名をブルギバ通りと変えてはいるが、建物の壁にうちつけられた町名の表示板の形は、パリの街でみるそれと変わらない。これら二つの部分で構成された町の中心部をとりまくように、独立以後の新生チュニジアを代表する第3の建物群が見える。アラブ的要素を加味した現代的な建物が立ちならんでいる。

これから紹介する CERES 研究所は、このようなチュニスの町の、第1と第2の部分の境界線にある植民地時代に建設された、古めかしい4階建てのビルディングにある。チュニジアの歴史的現実のなかから新しい知性を創造することが、この研究所に課せられた使命であるとするならば、まことに当をえた場所にあるといえるかもしれない。わたくしはこの研究所の客員研究員として1966年5月より1年半、この研究所にお世話になった。以下、そのときの見聞にもとづいてこの研究所を紹介してみよう。

II 沿革

CERES 研究所がチュニス大学に付属する社会科学の総合研究機関として設立されたのは、1962年4月のことであるから、まだその歴史は浅い。創立時にはフォード財団から、約4万ディナール(邦貨換算約2800万円)の寄付をうけていることからみても、この研究所の創立に

は、フォード財団の助力が大きかったことがうかがえる。事実その後の運営においても1966年以降、フォード財団は、毎年3万ディナール(邦貨換算約2000万円)くらいの寄付を行なっている。これとチュニジア政府の文部省予算からの補助金、年間約3万ディナールがこの研究所のおもな財源である。これにそのほかの収入を入れて、約7万ディナール(約5000万円)がこの研究所の毎年の予算の規模で、一応独立採算制をとって運営されている。フォード財団は、資金的には約半分を援助していることになるわけだが、それをもって研究所運営のあり方に直接干渉するというようなことはしていないようである。しかしチュニジア国を代表とするような研究機関において、その資金の半分を外国の財団の援助によらねばならぬという事実は、新生チュニジア国が直面するきびしい現実の一面面をあらわしているといえようか。

初代所長は、独立運動時代、ブルギバ現大統領の率いるネオデストゥール党の有力な幹部であり、独立後のブルギバ体制のもとでは農業大臣の要職もつとめたことのあるM・フィラリ(Filali)氏、1966年同氏はILOのマグレブ支部長に任命されたため、後任にはチュニス大学経済学部長のC・アヤリ(Ayari)氏が任命され、今日に至っている。フィラリ氏のILO マグレブ支部長任命は、かたちのうえでは栄転であるが、チュニジアの現実にコミットする度合いという意味では、この新しい地位は閑職である。こうした独立運動時代に活躍した人々が、第一線から閑職に退き、代わって、アヤリ氏のような若いエリート層が要職に台頭しつつあるのも、チュニジアの各界に共通した現象のようである。アヤリ氏は、まだ30代の青年である。チュニス大学のチュニジア人教授陣では、ただ1人のフランスの教授資格取得者(Agrégé)として、その能力は高く評価されている。経済とくに金融関係の専門家の少ないチュニジアにおいて、かれの活躍はめざましい。IMF 総会にはチュニジア代表として出席し、次期チュニジア中央銀行総裁の呼び声も高い人である。新生チュニジアを代表するテクノクラットの1人であるといえよう。わたくしの滞在中にこの人事異動は

行なわれ、アヤリ氏の所長任命については当然のことながら、社会学関係の研究者たちなどから反発があったようであるが、アヤリ氏の代表する新しい力にたちうちできる者はいなかったようである。しかしわたくしは、初代所長フィラリ氏に比べて、研究者というよりも実務的な果敢な行動力に富み、同時に何かにとり憑かれたように、テクノクラットとしての自分の能力を顕示することに専心しているアヤリ氏をみていて、何がかれをそのような行動にかりたてているのかと考えさせられた。かれの冷たい表情をみていると、それは情熱というよりもおびえのようなものではなからうかとさえ思われてきた。また、わたくしはチュニジア滞在中、農村を歩いてみたが、北アフリカの不毛な乾いた土地の中にこびりついてしまったような農民の姿をみると、こうした新生チュニジアの知性がどれほどかれらのエネルギーをひきだしているのだろうか疑問を感じざるをえなかった。かれらを古いものとして暴力的にたたきのめすことは、可能であるとしても。

III 機構・組織

この研究所の研究活動に関する最高決定機関は、学術委員会 (Comité Scientifique) である。この学術委員会は、チュニス大学学長を議長とし、関係各省の長官、CERES 研究所の所長ならびにシニアの研究員によって構成され、原則として年2回、学年はじめと学年末に会合をもち、CERES の研究活動に関する基本方針を検討し決定する。この基本方針にもとづいて、日常的な研究活動を所内において統轄するものとして、幹部会 (Comité de Direction) がある。この幹部会は、所長を議長とし、各研究部の長からなるメンバーで構成され、この研究所の研究活動から、財政、人事にいたるいっさいの業務に関する最高の決定機関となる。

この研究所の調査研究活動は、一応専門分野別に、人口学、経済学、地理学、言語学、社会学と、五つのセクションに分かれて行なわれている。各部には大学教授クラスの部長（現在の各部長は、すべてチュニス大学教授を兼任）のもとに数人の常勤研究員が配属されている。そしてこの常勤研究員1名を中心に、必要があれば非常勤のかたちで外部の研究者の協力を得、それにチュニジア大学の学生を研修生として参加させて1チームを編成し、一つの特定課題に関する研究を行なっている。以上のような体制で日常的な研究活動は実施されているのであるが、それを支えるいわゆる研究行政については、事務

局が置かれている。この事務局には出版部門も含まれていて、研究活動から派生する多くの業務を遂行している。

このような組織形態は、研究所も一つの社会的組織である以上当然のことであるが、わたくしが驚いたのは、この両部門間（調研部と事務局）に厳然とひかれている階級的差別である。研究員は、事務的な必要以外には事務局に働く人々とまったく話をしない。これには両者の間の学歴差（前者はすべて大学卒、後者には大学卒は皆無）でうらうちされた分業体制であり、かなりその人の人格に接近したかのごとく感じられる特性による分業体制であるがために、その差別はまことにみごとである。さらに事務局でも高校卒程度の若い人々が主要なポストを握り、そのほかは学歴なしの年配の人々である。この年配の人々の数の多いこと、このような小さな研究所で10人くらいいる。かれらは給料も低くまったく召使いのような仕事をしている。チュニジアの独立運動を経て今日に至る歴史をとにかく生きぬいてきたこれらの人々を、20歳たらずの青年が大学を卒業したという暗示だけで、かれらの数倍の俸給をもらい平然とアゴでこきつかえるようになることに、わたくしは目を見はらせられた。わたくしが「長老」支配原理のぬけきらぬ日本社会に生まれ育つたためであろうか。そうともいいきれないものがある。なぜならば、これらの青年は、完全に「長老」支配原理を脱却した人間には見えないからである。かれらは、学問という名で、ヨーロッパの長老に忠誠を誓うことによつてのみ、自分の村の長老をそのかぎりできわめて暴力的にふみ倒しているにすぎないのだ。考えてみるに、これもまたチュニジアの厳しい現実の一側面であろう。こういった状況には、わたくしはチュニジア滞在中たびたび出くわした。

IV 研究活動の成果

研究活動の成果は、大きく二つのチャンネルを通じて一般に公開されている。第1は、研究・機関紙などの出版物を通じて、第2は、公開セミナーの開催である。

研究叢書としては、今日までまだ数冊を数えるにすぎないが、この研究所の研究活動の特色を知るために、それらを列記しておこう。

A. Bouhdiba, *Criminalité et changements sociaux en Tunisie.*

S. Garmadi, *Traité de phonétique arabe de Jean Cantineau.*

M. Seklani, *La mortalité et le coût de la santé en*

Tunisie depuis l'après-guerre I, II.

A. Makhoulouf, *Structures agraires et modernisation de l'agriculture dans les plaines du Kef.*

雑誌は季刊ですでに10数号まで出ている。内容の構成は、論文、資料、書評からなり、執筆者はおもに内部の研究員であるが、外部の研究者にも発表の機会を与えている。また公開セミナーの記録も特集として掲載される。公開セミナーについては、各セクションの主催によって行なわれているが、1966～67年にかけて行なわれたセミナーの主題は次のようであった。

- (A) Sociologie: Les mutations actuelles de la famille au Maghreb.
- (B) Linguistique: Les applications pratiques de la linguistique.
- (C) Géographie: La modernisation de l'agriculture.
- (D) Economie: Le concept et la pratique du projet de développement.

わたくしは、CERES 研究所に滞在中、たまたまAの社会学セミナーに出席の機会をえた。北アフリカ研究の大家といわれているJ・ベルク(Berque)が座長をつとめた。かれの北アフリカ研究者、とくに社会学関係の人々の間における影響力の大きさをつくづく感じさせられた。かれは、開会の辞をフランス語とアラビア語で堂々とやっていた。参加者のなかには、伝統的イスラム研究者でフランス語をほとんど理解しえない人々もまじっていたが、そういう人々に対してフランス語で行なわれている討論の主要なポイントを、ベルクは、アラビア語で説明していた。座長とはいえ、フランス人であるかれが、そういう役割を演じているのを見ていると不思議な感じがした。ベルクで代表されるフランスの「知性」がかれらをいかに深くとらえているかがわかるような気がした。ベルクにかりうじて反撃しえたものは、このセミナーに招待されたアメリカの社会学者1人であった。かれは、このセミナーを支配する「神秘主義」と「非実証性」を批判したが、批判された相手には通じなかったようだった。社会科学研究分野における脱植民地化(その科学性はともかく)はほかの分野に比べて完全に遅れているといわざるをえない。CERES の研究員たちは、ベルクにいかにも認められるかということのために研究活動を行なっているといつて過言ではない状況がある。またこのセミナーでひとときわ弁舌さわやかに討論に参加していた一学生が印象にのこったが、この青年が翌年の6月、中東戦争が勃発したとき、チュニスで行なわれた大規模

な反イスラエル・デモの首謀者として逮捕され、20年間の強制労働という重刑をうけ、雑誌の写真でそのことを知ったときは、ふたたびチュニジアの現実をみせつけられるような思いがした。聞けばブルギバ自身がかつてはその被害者となった植民地法によって、この青年もまた判決を下されたという。かれのような活力に満ちた青年の知性を包摂しえないほどに、新生チュニジアのブルギバ体制は硬化しはじめているのだろうか。

V 最後に——「研究の自由」について

以上に述べたように、CERES 研究所は低開発諸国の研究機関としてはめずらしく、国の実践的政策目的とは一歩離れた「自由」な立場で研究活動を行なっている研究所として貴重な存在であるが、しかしここにも国家権力の意志と研究者の立場との相剋があらわれている。

わたくしの当研究所滞在中にも、何度かそういう場面を目撃したが、その代表的な例を一つ最後に紹介して、結語に代える。

事件の直接の契機になったのは、同研究所に新たに採用された一研究員が、元共産党員であるとの理由で、所轄官庁である文部省がその採用を取り消すように命令してきたことにはじまる。同時に研究所全職員の身元調査の提出を要求してきた。これはさきに述べた1966年の学生ストライキによって、官憲と大学側の関係が険悪化している状況を背景としておこった。この事態に対処すべく所内研究者の集会在連日開催された(その場合でも事務局関係者は1人も出席していない)。わたくしも親しい同僚と話し合い、集会も傍聴させてもらった。結局「研究の自由」という論理づけをもって、当局に抗議声明を提出することになった。またそれだけでこの一件についての騒動は終わってしまったようである。

同じ研究者として、わたくしもこの問題についてはいろいろ考えさせられた。「研究の自由」、それは「権力からの」「研究の自由」であろう。それは研究者の立場から一般的に肯定される命題である。しかし具体的な歴史的状況において、何が研究者の立場から「権力」としてとらえられるのかということのほうが問題である。それがなければ「研究の自由」も、研究者の身につけるべきアクセサリーにすぎず、そのような自由が奪われても、ぬくぬくとその「研究者」は、「研究」をつづけられる。このCERES 研究所にふりかかった「研究の自由」問題についても、わたくしはそのような不安を感じざるをえなかった。CERES 研究所の事件をみても、ブルギバ政

権が研究の分野において権力化するの、共産主義に対してである。そして実際の政治活動のみか研究の分野においてもそれを許容しえないということは、ブルジョア民主主義でさえ、ブルギバ政権は許容しえないほどに、みずからの権力基盤に対する不安感をもっているということである。1964年のブルギバ暗殺未遂事件を契機に、そのときブルギバを支持した共産党をブルギバは非合法

化してしまつた。何がかれを、これほどまでに反共化させているのか、マグレブ諸国に共通した特色でもあり検討するに値しよう。とにかくチュニジアの現実、研究者にとってはまことに厳しく、この研究所も自立的に発展するためには、なお多くの困難を克服しなければならないだろう。

(調査研究部 原口武彦)

アジア経済研究所刊行

◆ アジアを見る眼シリーズ (新書版・並装ビニールカバー付) ◆

タイの日本企業	大蔵省官房調査課 アジア経済研究所	山村勝郎 著 山田中忠 治 著	[¥ 200]
アジアの中小工業	大阪市立大学 経済研究所	狭間源三 編著	[¥ 200]
インドネシア	大和銀行支店副長 アジア経済研究所	久米孝彦 著 一岸幸 監修	[¥ 200]
インドの経営者	アジア経済研究所 専門調査員	田部 昇 著	[¥ 250]
タイ農業の真実	日本貿易振興会理事	長谷川善彦 著	[¥ 250]
メソポタミアの土	アジア経済研究所	糸賀昌昭 著	[¥ 250]
日本の対華財政投資	静岡大学 講師	安藤 実 著	[¥ 250]
パンバの発展と停滞	元アジア研究センター アイレス派遣員	篠沢恭助 著	[¥ 300]
アジア開発の基盤を築く	海外コンサルティング 企業協会	久保田豊 著 山口仁 秋 著	[¥ 280]
毛沢東の国		アジア経済出版会 編	[¥ 330]
アジアのエネルギー	東京工大 教授	林 雄二郎 著	[¥ 250]
オーストラリアの経済	元アジア研究 センター派遣員	岩崎八男 著	[¥ 280]
メコンとイラワジの間	アジア経済研究所	今川瑛一 著	[¥ 250]
東南アジアと日本	朝日新聞論説委員	丸山静雄 著	[¥ 350]
フィリピンの経済	元フィリピン大使 館一等書記官	生田豊朗 著	[¥ 250]
低開発国開発理論の系譜	一橋大学 助教授	坂本二郎 著	[近刊]
海外投資と法律	アジア経済研究所	桜井雅夫 著	[¥ 280]
アジア経済の未来像	アジア経済研究所	矢野誠也 著	[¥ 300]
シベリア経済史	専修大学 教授	池田博行 著	[¥ 330]
ラテン・アメリカの経済	神奈川大学 助教授	大原美範 著	[¥ 330]
アジアの農業とその開発	アジア経済研究所 所長	小倉武一 編著	[¥ 380]
中国文化大革命と ベトナム戦争	アジア経済研究所	今川瑛一 著 浜勝彦 著	[¥ 280]
続 アジアの中小工業	大阪市立大学 経済研究所	狭間源三 編著	[¥ 300]
アジア経済の旅	アジア経済研究所	矢野誠也 著	[¥ 280]
モンsoonアジア	立教大学 教授	別技篤彦 著	[¥ 300]
近代中国農民革命の源流	農林省 農業総合研究所	彭本秀 著 山本秀夫 著	[¥ 280]
ラテン・アメリカの開発政策	神奈川大学 助教授	大原美範 著	[¥ 300]

アジア経済出版会発売